富山新聞
2011年（平成23年）9月13日（火曜日）

東亜同文書院大 富山展示会PR

馬場センター長ら

愛知大東亜同文書院大記念センター長の馬場毅教授と前センター長の藤田佳久教授が12日、富山新聞社を訪れ、17、18日に富山市の富山国際会議場で開かれる「愛知大学東亜同文書院大学記念センター資料の富山展示会・講演会」（富山新聞社後援）に向け、意欲を語った。

展示会では、愛知大の前身である東亜同文書院大の最後の入学生で、太平洋戦争の激化に伴い富山に避難し、呉羽分校で過ごした第46期生の学校生活や、富山大空襲後の学生による救援活動など、同センターの資料を並べる。また、馬場教授ら3氏が東亜同文書院大や呉羽分校などについて講演する。馬場教授は「あまり知られていない東亜同文書院大について、富山の人に広く知ってもらえればうれしい」と話した。同センター職員の山口恵里子さんが同行した。

意欲を語る（左から）藤田教授、馬場教授、山口さん＝富山新聞社

北日本新聞
2011年（平成23年）9月16日　金曜日

愛知大学東亜同文書院大学記念センター資料の富山展示会・講演会

「東亜同文書院大学から愛知大学へ —最後の校舎呉羽分校—」

愛知大学東亜同文書院大学記念センターは2006年から5年間、文部科学省の学術研究高度化推進事業に採択され、愛知大学の前身校であり、1901年に上海に設立された東亜同文書院大学の研究と収蔵資料の公開を「東亜同文書院大学から愛知大学へ」をメインテーマに、横浜からスタートし、東京、福岡、弘前、神戸、シカゴ、京都、米沢、名古屋で展示会と講演会を行ってまいりました。

本年は東亜同文書院大学最後の入学生で、戦争の激化により東シナ海を渡れなかった第46期生が過ごした旧呉羽紡（現・富山市民芸術創造センター）のある富山市で開催いたします。富山空襲直後の救援活動も含め、呉羽分校での学生生活や東亜同文書院について広く知っていただけたら幸いです。

東亜同文書院

呉羽校舎（旧呉羽紡）

愛知大学

展示会　2011年9月17日（土）～18日（日）10:00～18:00

講演会　2011年9月17日（土）13:30～16:30

場所　富山国際会議場 2階会議室
●JR富山駅から徒歩で約15分 ●JR富山駅市内電車「セントラム」で約7分 国際会議場前下車

講演
- 馬場　毅　現代中国学部教授・東亜同文書院大学記念センター長　上海にあった東亜同文書院について
- 井上方弘　東亜同文書院大学46期・昭和27年愛知大学卒業　東亜同文書院呉羽分校
- 宮田一郎　東亜同文書院大学41期・元NHK中国語講座講師　東亜同文書院の中国語教育と私

入場無料　どなたでもご自由にご参加ください

■主催／愛知大学東亜同文書院大学記念センター ■後援／富山市教育委員会・（財）霞山会・愛知大学同窓会・北日本新聞社 ほか

お問い合わせ　愛知大学東亜同文書院大学記念センター　〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1
TEL.（0532）47-4139　E-mail tshien@ml.aichi-u.ac.jp

北日本新聞
2011年（平成23年）9月17日　土曜日

愛知大学の前身 呉羽に

富山国際会議場で展示会

東亜同文書院大学呉羽分校としても使われた旧呉羽紡績の建物

愛知大学（愛知県豊橋市）の前身となる「東亜同文書院大学」が、終戦前後の一時期、富山市の旧呉羽紡績内に置かれていた。開設時期は短いものの、戦後の移設もにらんだ設置だった。17、18日に富山国際会議場で開かれる同大学の展示会では、同文書院大学が中国で取り組んだ活動を紹介するとともに、講演会を通じて呉羽での様子を振り返る。北日本新聞社後援。

東亜同文書院大学は1901（明治34）年、元首相、近衛文麿の父である篤麿らが中心となって中国・上海に設立した高等教育機関。日中友好の理念を掲げ、大志を抱いて大陸に渡ってきた若者らが集った。終戦で閉校されるまで、46期、約5千人の学生を輩出した。

富山市呉羽町に分校が置かれたのは、1945年。戦争の激化で中国に渡れなかった新入生を迎え入れるため、同年7月25日に外務書の許可を得て開設された。中国から移ってきた教員13人が、学生177人を教えた。愛知大学東亜同文書院大学記念センター長の馬場毅教授は「当時の呉羽紡績の副社長が院のOBだったという縁があり、場所の提供を受けたようだ」と説明する。

だが、開設から1カ月もたたない8月15日に終戦を迎え休校。10月15日には、中国の同文書院大学を富山に移転させることも視野に授業を再開したが、東京にあった大学本部が連合国軍総司令部（GHQ）に接収され、11月半ばに閉校となる。1年後、同大学関係者によって、愛知県で開設されたのが、現在の愛知大学になる。

呉羽分校の学生が学んだ期間は実質60日と短いが、富山大空襲では救援活動に取り組むなど、濃密な日々を過ごしている。

「東亜同文書院大学から愛知大学へ―最後の校舎呉羽分校」と題した展示会では、呉羽分校の様子をパネルで紹介するほか、同大学が所蔵する孫文関係の資料などを展示する。

展示会は午前10時～午後6時。17日には午後1時半から講演会を開催。呉羽分校で学んだ愛知大学OBらが、当時を振り返る。いずれも入場無料。

北陸中日新聞
【富山総合】 2011年（平成23年）9月18日（日曜日）

東亜同文書院大呉羽分校OB
戦時中の思い出語る

愛知大の前身で上海にあった東亜同文書院大の卒業生らによる講演会（北陸中日新聞など後援）が十七日、富山市大手町の富山国際会議場であった。

愛知大東亜同文書院大記念センターが主催。東亜同文書院大の呉羽分校（現富山市民芸術創造センター）で学んだ富山市の井上方弘さんが、分校での思い出などを語った＝写真。

井上さんは太平洋戦争の影響で上海の校舎に行けず、終戦直前の一九四五（昭和二十）年七月に開校した分校に入学。戦闘機工場での作業の傍ら勉強した経験や、先輩に中国語を教えてもらった話を披露した。富山大空襲で救援活動に携わったときは「神通川に転がった遺体や赤ちゃんを背負って泣く母親の姿はまさに生き地獄だった」と振り返った。

このほか、馬場毅センター長や同大卒業生もそれぞれ講演した。

会場では、センターが収蔵する写真や書などを十八日まで展示している。

（永井響太）

富山新聞
2011年（平成23年）9月18日（日曜日）

戦前戦後の教育学ぶ
愛知大東亜同文書院大センター資料 展示・講演会

東亜同文書院大について講演する馬場氏＝富山市の富山国際会議場

愛知大東亜同文書院大記念センター資料の富山展示会・講演会（富山新聞社後援）は17日、富山市の富山国際会議場で開かれた。愛知大の前身で、20世紀初頭に上海に開設された東亜同文書院大の呉羽分校に関する講演などを通し、来場者は戦前戦後の教育について理解を深めた。

講演会では、佐藤元彦愛知大学長のあいさつに続き、馬場毅同センター長が講演した。馬場氏は、日本人が中国との貿易の実務を学ぶ目的で同書院大が設立されたことや、戦争が激化し、上海に渡れなかった学生のために旧呉羽紡績の一角に呉羽分校が設けられたことなど、学校の歩みを語った。呉羽分校で学んだ井上方弘氏や宮田一郎氏も講演した。

展示会場には、同書院大で指導し、孫文の秘書を務めた山田良政をしのび孫文がしたためた墓碑の書や、戦前の約40年間にわたり学生が中国の広域で行った実地踏査の詳細なルートなどが紹介された。

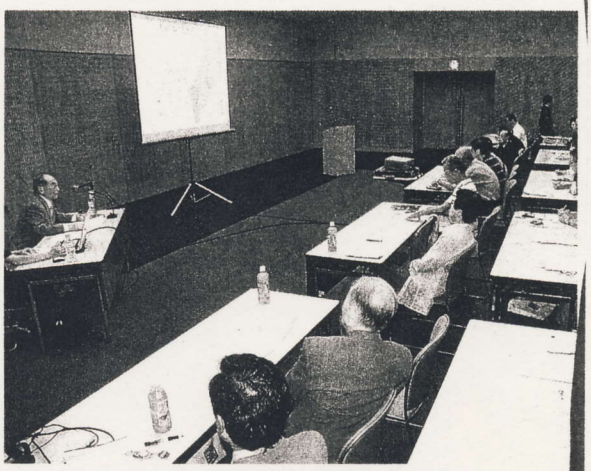
展示は18日まで。

北日本新聞
2011年（平成23年）9月18日　日曜日

呉羽分校の思い出語る

東亜同文書院展示会　井上さん（富山）講演

愛知大学（愛知県豊橋市）の前身で、終戦前後に富山市呉羽町に分校を置いた東亜同文書院大学の取り組みを紹介する展示会が17日、富山国際会議場で始まった。講演会も開かれ、当時呉羽分校で学んだ井上方弘さん（富山市）が学生時代の思い出を語った。北日本新聞社後援。



講演会で呉羽分校の思い出を語る井上さん（左）

同文書院大学は、大陸に渡った若者が学ぶ場として中国・上海に開設された。呉羽分校は、戦争の激化で中国に行けなくなった学生を受け入れるため旧呉羽紡績内に置かれた。終戦を挟んで約60日間、240人の学生が学んだ。

井上さんは、富山大空襲で他の学生と一緒に救援活動をした思い出などを語り、「今後も中国との草の根交流に尽くしたい」と述べた。同文書院大学記念センター長の馬場毅教授、41期生の宮田一郎さんも講演した。

展示会では、書籍や同文書院大学の院長を務めた元首相、近衛文麿がしたためた軸など約60点を展示。来場者は興味深そうに見入っていた。

展示会は18日も開かれる。

中日新聞
2011年（平成23年）9月22日（木曜日）　三河　愛知

愛大前身校OB　戦時中体験語る

富山の分校

愛知大の前身で上海にあった東亜同文書院大の卒業生らによる講演会（中日新聞北陸本社など後援）が、富山市の富山国際会議場であった。

愛知大東亜同文書院大記念センターの主催。東亜同文書院大の呉羽分校（現富山市民芸術創造センター）で学んだ富山市の井上方（まさ）弘（ひろ）さんが分校での思い出などを語った。

井上さんは太平洋戦争の影響で上海の校舎に行けず、終戦直前の一九四五（昭和二十）年七月に開校した分校に入学。戦闘機工場での作業の傍ら勉強した経験や、先輩に中国語を教えてもらった話を披露した。富山大空襲で救援活動に携わったときは「神通川に転がった遺体や赤ちゃんを背負って泣く母親の姿はまさに生き地獄だった」と振り返った。

馬場毅センター長や同大卒業生の講演もあった。